

にある。この要請のなかで、本書が特徴的に検討を加えているレーニンやヒルファディングの所説に新たな関心が呼び起こされており、これが、さきのフレーム・ワークの再検討につながるものとなりうるであろう。

本書はその成立を既発表の独立論文に求めることができるが、以下のような構成をとっている。第1章経済学の方法と独占資本主義の理論、第2章独占理論におけるヒルファディング問題、第3章『帝国主義論』と独占、第4章独占資本・独占体・独占価格、第5章『帝国主義論』と資本の集積、第6章ヒルファディングの金融資本、第7章独占資本か金融資本か、第8章独占価格論の基本性格、の全8章からなる。

独占資本の理論の展開方法については、とくにわが国においては、周知のとおりいくつかのこととなった見解がおこなわれている。現代の経済学的認識および実践的課題とも関連して、この方面の議論は、いっそう複雑多岐にわたる傾向を示している。このことにかんして著者は、つぎのようにのべている。「資本主義経済学の現代的体系は、そこで取り扱われる諸範疇が『現代ブルジョア社会』の内部でもつ相互重層的な連関によって、その論理的継起が規定されている」(15ページ)と。いわゆる資本主義一般の理論と独占資本主義の理論とが、いかなる論理的連関をもって展開されるべきかということにかんして、上記の「相互重層的な連関」の析出が重要な意味をもつであろう。しかるに、そのことが、資本主義一般の理論としての『資本論』体系を理論的な基準としてなされねばならないところに、1つの問題点がある。例えば、この点は、本書におけるごとく、産業資本をもって、「資本類型の一般的基础」(19ページ)として把握するような視点に具体的に現われているといつてよいであろう。これは、大なり小なり、『資本論』体系を原理論として、完結した体系であることを暗黙のうちに前提することになるのではないと思われる。もし、本書において、かかる視点が、一定の役割を果たしているとすれば、本書においては、独占資本をも、1つの資本類型としてとらえることとならざるを得なくなるように思われる。

独占資本主義の理論が、上述のように、1つの資本類型として把握されるようなものであるとすると、それと帝国主義論とが、いかなる関連にあるかが問われねばならなくなるであろう。著者は、レーニンの『帝国主義論』の体系的な特徴および論理的特徴をつぎのように取りまとめている。すなわち「レーニンは『帝国主義論』が経済学の範疇体系=理論体系の見地から、資本主義のこの段階に独自の諸範疇を析出し、それらの基本的要素

森岡孝二

### 『独占資本主義の解明』

—予備的研究—

新評論 1979.11 289ページ

ここ数年、独占資本主義論ないし独占理論の体系化への試みが活発になされている。とりわけ、高度成長末期から、いわゆる低成長時代といわれた70年代に入つての資本主義経済の停滞の状況は、現代資本主義論や、独占資本主義論に再び新たな課題を提起した。それだけでなく、いわゆる帝国主義論の分野においても、第三世界論の台頭ともからんで、新たな方向への理論展開が模索されつつある。こうした動向は、この分野の共通のパラダイムや理論的フレーム・ワークに再検討を迫る情況

の連関と相互関係とを展開している、ということを示唆しているのである」(32ページ)としている。ここにいう帝国主義段階に特有な範疇の析出という方法は、資本主義一般の理論の射程とはあきらかにことなつた対象を問題とすることであるが、範疇析出の基礎は、やはり「資本主義一般の理論」である。同時に、ここでは、この段階の資本主義の特徴が、ただ現象的特徴として析出されるのではなく、あきらかに範疇として析出されるのである。これは、類型論の方法とは、まったく異なる視角からするものであろう。著者は、本書全体を通じて、レーニンの『帝国主義論』を、独占資本主義論の基礎範疇の展開における不朽の労作として意義づけている。だとすると、他方に類型論の方法に意義を見出す独占資本主義の理論にかんする著者の意図に、いまひとつ不明瞭な点がある。

レーニンの『帝国主義論』の検討とともに、本書を貫く基本的問題意識は、著者自身の表現方法に従えば、「独占理論におけるヒルファディング問題」である。著者のヒルファディング評価は、たとえば「金融資本という範疇を本質的に新しい資本範疇としてうちたてながら、その理論的規定を『資本論』で展開された資本の一般的概念のうちに還元してしまわざるをえなくなる」(25ページ)という指摘に明示されている。この点は、第2章において、著者によるヒルファディングの方法論的批判的検討であきらかにされた、ヒルファディングにおける経済学の理論体系と、経済学の理論の歴史との混同という論点に結びつくものである。このような批判の方法は、一面、きわめて正当なものであるといつてよいのであるが、他面、ヒルファディングが『金融資本論』における理論の「展開」のなかで特徴的にとつた複線的方法ないし範疇の重層的展開の側面を看過してしまうおそれがあるように思われる。すなわち、著者の指摘のとおり、ヒルファディングにおいては、理論展開と歴史的な展開とが、方法的に自覚的に関連づけられていない。そこに一貫する方法は、資本主義の一般理論、すなわち、ヒルファディングの眼からみた『資本論』体系と、ヒルファディング自身に課せられた分析対象としての現実とが、重ね合わせであるにすぎない。ヒルファディングにあっては、現実からの抽象よりは、マルクスの範疇に従つて、それを現実にあつては、たんに機能主義的に加工することが、理論構成の主要課題とされてくるのである。ここに現実認識の方法論的な基本的欠陥をみることができる。著者によるヒルファディング批判は、むしろ論理的=歴史的方法がヒルファディングにおいて正しく把握

されているかいなかに向けられている。そのかぎりでは、ヒルファディングには、現実と、それを分析するための理論との機械的対比があるにすぎない。この点で、『金融資本論』は、論文「カール・マルクスにおける理論経済学の問題提起」などと比べて、方法論的には後退してさえいるといわねばならないであろう。

ヒルファディングの方法が、E. マッハの強い影響下にあることは、近年のヒルファディング研究で明らかにされつつあるところである。著者も、この点に関して、「ヒルファディングの誤りや欠陥はしばしばマッハと結びついているが、彼の功績と達成はやはりより多くマルクスと結びついている」(70ページ)としている。ヒルファディングは、決して弁証法を自覚的に展開しなかつた。あるいは、存在の論理を思惟に反映させるといふ基本視座を決して理解しなかつたといつてよい。それがマッハ主義の影響によるものであることも十分うなずけることである。ここから金融資本を現象形態ととらえるごとき転倒が生ずるのである。しかし、このような方法的欠陥ゆえに、かれをして独占資本主義の一般理論の把握に至らしめなかつたと結論づけるのは早計であろう。

ヒルファディングには、たしかに固有の剰余価値論や、再生産論の展開はない。しかし、株式会社論を前提に展開されるかれの独占形成論には、独占資本主義の一般理論にとって無視することのできない視座が読みとれるのである。それは、独占資本の蓄積行動のなかにある二面、すなわち生産資本としての蓄積過程の展開と、貨幣資本運動の担い手としての蓄積過程の展開とが、有機的にして、かつ不可分離なものとして結合されているという点である。競争の形態変化と、創業利得の獲得機会とが、ともかくも対応させられていること、これは、独占理論にとって重要な問題を提起するものではなからうか。この点、本書のごとく「資本の一般的概念から類推する」(75ページ)ことによつてのみ、金融資本が説かれるとは一概に言いえないのである。したがつてまた、「資本主義一般の貨幣的、信用的基礎の考察から直接に金融資本を証明しようとするヒルファディングの方法」(74ページ)とするのも納得しがたい。

本書でのヒルファディング方法論の批判を検討する序に、第6章のヒルファディング金融資本の概念をめぐる本書の見解をみてみたい。本書は、独占資本の一般理論の構築に当つて、独占資本の資本蓄積過程の理論的分析を、その基軸とすることを強調するが、そのさい、資本蓄積過程に基本的性格規定を与えるものとして、金融資本の展開を重視するという立場を一貫させている。

著者のヒルファディング金融資本にかんする理解は、それが創業利得の理論を軸にして展開されていること、とりわけ創業利得の発生機構にこそ、産業独占と銀行独占との相互促進的な進展過程がある(180ページ)とするものである。したがって、著者にとっては、創業利得にかんするヒルファディングの理論を一面高く評価するとともに、ヒルファディングは、結局のところ、創業利得が詐欺そのもの——小規模株主からの収奪——であることを軽視、ないし看過したとして、批判するのである。

本書は、まずヒルファディングにおける金融資本規定の多面的性格をとりあげる。それらが、総じて、「擬制資本の所有や交換をてことした銀行と産業との相互依存関係」(181ページ)にあるとし、いわゆる株式資本の擬制資本化を契機とする所有集積との関係をみて、そこに金融資本の基本的側面をとらえている。このような把握の仕方は、たしかにヒルファディングに即してみた場合納得しえられるものであろう。しかし、さきにもふれたように、産業独占形成の過程——競争の変容——がこれに絡んで展開することの認識も、ヒルファディングには存在する。これも著者ののべるごとく究極的には、いわゆる変換法則に解消されてはいくのだが、問題はなぜ解消されてゆくのかにある。その契機の1つは、純粋に金融的側面であるよりは、自由競争下におけるごとき、資本の移動が妨げられることに求められている。ここに、利潤率の均等化が貫徹するとき、創業利得の発生による仮象的均等化が、利回りの均等化として実現されると考えているのである。これは、擬制資本の形成と独自の運動部面を展開する金融的部面を、現実資本の運動が包括し、それによって、新たな支配資本の形成へ、既存の資本関係を止揚してゆくことを示唆するものとなっている。著者は、この点よりも『金融資本』第2編の前提である「産業資本家の機能変化」を重視して、それを金融資本規定につなげて理解しようとしている。ここでは、著者の批判論点である利潤生み資本の利子生み資本への転化なる、きわめて奇妙な関係が前提とされたり、企業者利得の一括先取り説(これらの論点については、拙著『信用論と擬制資本』1971年で取上げたことがある)が展開され、まさに著者のいう混乱が作出されているのである。したがって、第2編を、金融資本規定と直接結びつけて批評することは、必ずしも十分な批評とはいえないのである。

さらに、著者は、ヒルファディングの産業資本家の貨幣資本家への転化を「こじつけ」だときめつける。これがいかなる意味で「こじつけ」なのか理解に苦しむ。こ

こには「こじつけ」ですますことのできない問題点が伏在していないか。それは著者自らによって強調されていた所有集積＝支配の論点とも関連している。すなわちヒルファディングは、ここで株式会社の形成にともなって、資本の所有関係が変化し、本来の資本所有関係から疎外された資本所有関係が形成され、それが社会的な  $V+M$  の全体をのみこむまでに擬制資本化によって拡大されることを示唆しているのである。これは、同じSPDの修正主義の理論家E・ペルンシュタインの株式会社論への批判でもあり、そこには、このような資本所有関係が社会的詐欺・瞞着の制度となるのが含意されているのである(この点、倉田稔『金融資本論の成立』1974年を参照)。この点でも、ヒルファディング株式会社論の達成には、大きなものがある。擬制資本化とその独自の運動が、ヒルファディングの表現によれば、 $A_0-G-A_1$ なる所有転換に支えられていることは、上記の資本所有関係の変容の理解にとっても重要なことなのである。

擬制資本範疇の理解は、資本還元という、計算的(逆算的)性格を中心にするのではなく、擬制資本を創出する資本の二重化する関係が基本となるだろう。これについては、マルクスが明確に把握している。この論点は、計算的な擬制資本価格の算出とはことになって、擬制資本と現実資本との関連を理解することに通じている。さらに、いま1つは、擬制資本が、本来の貨幣資本の投下対象となるということにかんする理解である。「擬制資本は利子生み資本の形態にある」(192ページ)というのも、このような意味においてである。

著者は第7章「独占資本か金融資本か」において、スウィージーの周知の所説を検討しつつ、金融資本にとっての独占利潤が、金融的収奪にもとづく独占利潤であることを確認している(241ページ)。これを著者はレーニンの分析を典拠として析出している。創業利得にかんしていえば、レーニンは、ヒルファディングの混乱を純化し、あくまで擬制資本証券の流通運動から問題にしていることはそのとおりである。しかし、これが『帝国主義論』の金融資本規定に意識的に適用されているかという点、さほど明確ではない。『帝国主義論ノート』のレーニンは、この点ではるかに徹底している。『帝国主義論』では、銀行独占の証券発行・引受業務の側面から観察されているといってよいであろう。このことは、金融資本の人格的担い手の問題とも関連していることである。したがって、金融的収奪にもとづく独占利潤は、独占的銀行資本の創業利得の取得に帰着する。この点は、ヒルファディングにも先行的に展開しているところである。こ

うしたパースペクティブのもとでヒルファディングの創業利得論をみれば、それが、いたずらにレトリカルに歪曲されているとだけ言って済むことではないであろう。レーニン以上に、ヒルファディングには、独占的結合による独占利潤の現象面での鋭い観察があるといってもよいように思うのである。問題は、いわゆる独占利潤一般の解明との論理的連繫が方法的に不可能になっていることであろう。この点著者が、『金融資本論』第3篇の問題を、独占形成論としてまづおさえていないこと、専ら独占形態論、独占価格論としてのみみていることに問題があるといわねばならない。

以上、ここでは、著者の基本的方法的視角およびヒルファディング、レーニンにかんする論評を中心にみてきた。本書は「予備的研究」とサブタイトルが付されているように、独占理論の主要内容に方法論的検討を加え、今後の展開方法を示そうとしたものである。そのさい、著者は、このような視角からほとんど顧られていなかったヒルファディングに分析の1つの焦点を置いて、独占資本の蓄積の金融的側面に注目し、金融資本のカテゴリーのもつ独占理論体系のなかでの不可欠的地位を確認しようとしたことは、本書の大きな貢献ではないかと考えられる。今後、著者の積極的な論点の展開を期待してやまない。

〔飯田裕康〕